

日本に於ける黄冶窯唐三彩と絞胎器の流行とその影響

廖永民 張文霞 巽淳一郎翻訳

訳者序

廖永民氏は、元鄭州市文物考古研究所の副研究員、同研究所學術委員会常務顧問等を歴任された方である。河南陶磁器研究の第一人者で、2000年科学出版社刊行の『黄冶唐三彩窯』（鞏義市文物保護管理所編著）の共同執筆者として、日本でもよく知られている。張文霞女史は、氏の弟子に当たる方で現在、同研究所の助理研究員をしている。二人には、奈良文化財研究所と河南省文物考古研究所とが実施している唐三彩に関する共同研究に対して支援をいただいている。昨年夏に表記論文を手渡され、日本の雑誌に投稿したいとの相談を受けた。拝読すると中国人研究者の日本出土唐三彩や奈良三彩に対する捉え方がよく分かる論文であり、日中共同研究の一環として、ここに紹介することにした。尚、この論文は中国では未発表であり、原文とともに写真や図も用意されていたが、紙数の関係上、すべては掲載できない旨を断り、著者も了解済みである。

はじめに

秦漢時代、既に中日両国は接触があり、政治的交流と文化藝術部門の関係も不断に深化を見せていた。日本民族と中国大陸の政府間交流、民間交流が頻繁になるのは隋唐時期（581～907）で、日本が中国大陸の文化藝術の影響を最も強く受けた時期でもある。文化藝術交流は、両国間の外交交渉、貿易活動とともに不断に拡大し展開していった。中国様式をモデルにしたもの、その影響を受けたものは、都城の構造配置、宮室建築、絵画藝術、文学だけではなく、その他に、中国陶磁もある。それには唐初に中国北方で新たに出現した唐三彩低温釉陶の製品も含まれ、これもまた日本民族に強烈な影響を与え、今日、中日文化藝術交流の歴史の証人となっている。

1 日本出土黄冶窯唐三彩と絞胎製品

1998年10月3日から11月23日の間、日本愛知県陶磁資料館は、開館20周年を記念して、『日本の三彩と緑釉』展を開催した。展示内容は豊富で、日本出土中国陶磁（主として唐三彩、次いで緑釉陶器と絞胎器）、朝鮮半島の陶

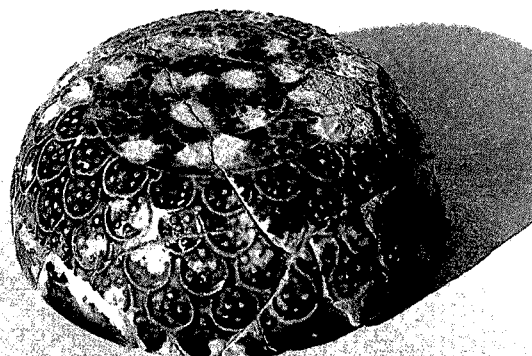


図43 三重県三重郡朝日町繩生庵寺塔心礎出土三彩碗

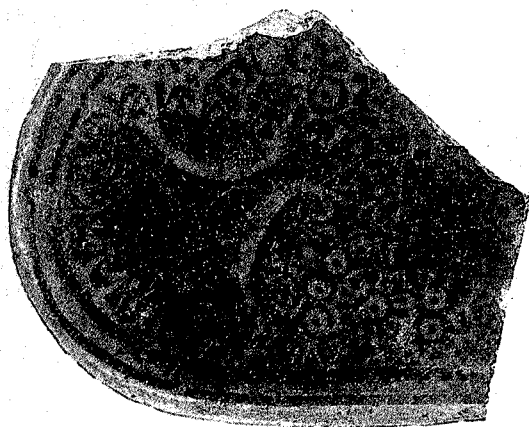


図44 平安京左京四条三坊出土象嵌絞胎団花緑釉陶枕

磁と日本出土の国内生産三彩（奈良三彩）、緑釉陶器と窯跡出土陶器を包括している。また、全陳列品をまとめ『日本出土の三彩と緑釉』の一書に集成している。書の後半部には「彩釉陶器出土遺跡地名表」、「彩釉陶器出土分布図」、そして関連する「文献目録」等が付されている。筆者は館総長植崎彰一氏に一冊恵贈頂き、拝読することができ、多くの収穫を得ることができた。ここに、植崎彰一氏に対し衷心より感謝の意を表します。

図版の配列は第一部が中国陶磁であり、これによって古代に日本が輸入した中国陶磁の種類、時代的特性、分布及び普及状況が大変明快に理解できる。書に収録中国陶磁の三彩と絞胎製品の多くは、河南鞏義市黄冶窯で生産されたものである。盛唐、中唐、晩唐の三彩枕・罐・壺・三足炉（鍩）・薰炉蓋・瓶・大皿・器蓋・器足、絞胎枕・罐・碗等がある。他に五代、北宋初めの緑釉陶器、例えば、象嵌絞胎団花緑釉枕（図44）、篋編型碗等の出陳品もある。中国陶磁出陳品の多くは、破片であり、完

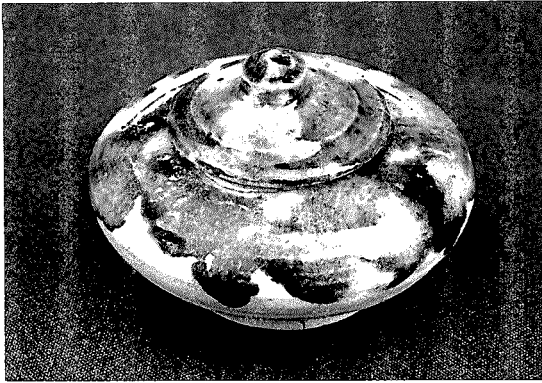


図45 鞏義黄冶窯出土三彩蓋付き盃

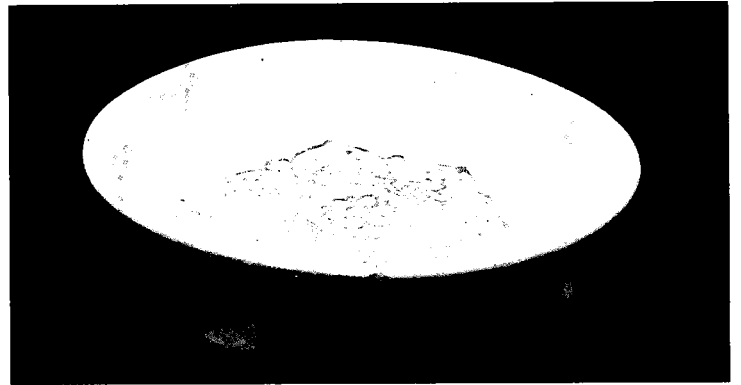


図46 鞏義黄冶窯出土素焼き宝相華紋三足盤

形に復された品は、三彩枕と椀各1点だけである。日本出土唐三彩で年代が最も古いのは、7世紀期末の三重県縄廃寺塔心礎出土三彩椀である(図43)。

「現在、唐三彩は7世紀末から9世紀初のもので、北は群馬県から南は福岡県まで総数48箇所の遺跡から出土し、当然その中心は奈良県と京都府であり、次いで出土が多いのは福岡県……¹⁾」。出土地点は主として「中国航路経由地と国の中枢部である²⁾」。殊に貴重な点は、書中に納められた大部分が日本各地における考古学調査、発掘調査で発見されたものであり、信頼できる確かな層序と確かな出土地点の裏付けを有している事である。換言すれば、それは、ある特性を持った遺跡、古建築、古墓葬と依然として密接な関係を有しているという事である。大多数は零細な破片であるが、完形品と同様に時代的特性を留め、日本の社会史、宗教史、芸術史、陶磁史や中日文化・芸術・貿易・外交史等の研究にとって極めて価値ある実物資料であるといえる。この書は、今の所、日本学者による唐三彩総合研究の最新の成果を代表するものとなっている。

我々が更に注目する所は、『日本の三彩と緑釉』の中国三彩釉陶部分において、科学的系統的に扱われた唐三彩資料そのものも極めて重要であることは勿論の事、この書では初めて日本出土唐三彩の産地を明らかにした点である。これは明らかに唐三彩の学術研究においてキーポイントとなる内容であり、かつ基本的な要素である。かつて日本古代陶磁業生産に対して深刻な影響を与えた源泉が何処にあるかに関して、誰もが注目する唐三彩の産地問題をつぶさに受け止め、日本の著名な学者矢部良

明、長谷部楽爾氏等は、既に10数年前に「唐代両京の長安、洛陽の周辺にあり」と推察している³⁾。この問題を徹底的に解決したのが、日本のもう一人の有名な学者—檜崎彰一氏であった。氏が日本東洋陶磁陶磁学会会長の時期、1994年3月、自ら河南省鞏義市黄冶唐三彩窯と陝西省耀州市黄堡窯を訪ね、実地に調査を行い、両窯出土文物資料を真剣に観察し、多大な成果を得て、檜崎先生は感動してやまなかった。氏は「日本における施釉陶器の成立と展開」の一文中で、次の様に明確に提言している。日本出土唐三彩は、すべて鞏義黄冶窯の製品であり、唐三彩を模倣して生まれ、発展した日本の奈良三彩の根源も、まさに鞏義黄冶窯に在る⁴⁾。檜崎彰一先生の論断は、明らかにこの方面の研究活動を一步推し進めることになった。

鞏義市文物保護管理所の職員達が、数年来の努力を重ねて編纂した『黄冶唐三彩窯』は、既に科学出版社から出版されている。書中に納められた資料の80パーセント以上が初めて世に出るものである。この書は、採り上げるべき者は全て採り上げ、かつ系統的に黄冶窯の文化内容を表している。

黄冶窯は唐初に始まり、宋金時期に至る500年余りの間、三彩製品の生産は絶えることなく、開窯、発展、隆盛、衰落、停焼に到る全過程を経た。黄冶窯は、今の所発見されている中では、最も古くから三彩製品を焼成し、規模が大きく、延続時間も長く、製品の数量と種類が最も多い窯場である。中国封建社会の鼎盛段階に当たる唐王朝の時期に、典雅優美な造型、多種多様な装飾、艶やかできらびやかな釉彩、独特な藝術風格を備えた三彩製

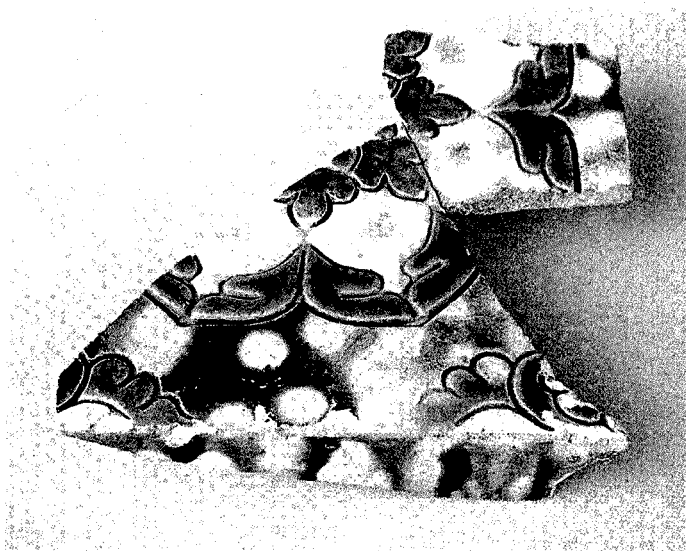


図47 群馬県新田郡新田町境ヶ谷戸遺跡出土三彩陶枕

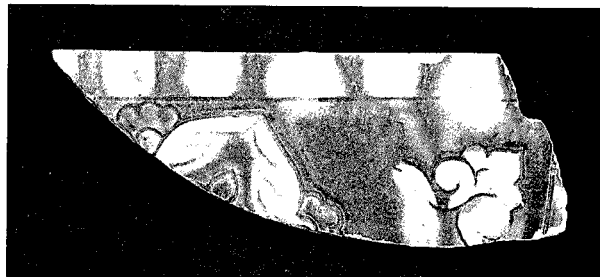


図48 鞆義黄冶窯出土三彩陶枕片

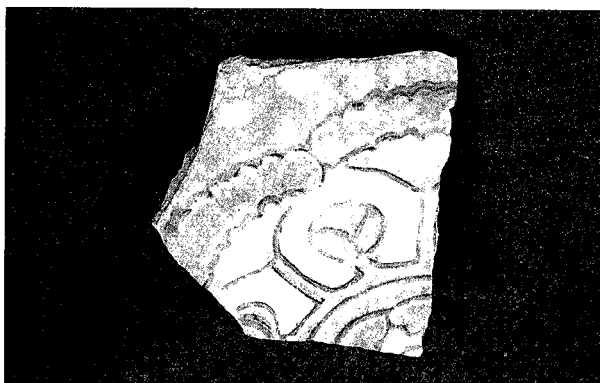


図49 鞆義黄冶窯出土三彩陶枕片

品と絞胎製品を焼造し、当時の宮廷、有力貴族から民間に到る各層の需要に応じる主要な供給地となった。

また、その製品は、高級工芸品として友好往来のある国家に進物として贈られ、更に多くは、貴重な商品として、遠くアジア、アフリカ、ヨーロッパなどの地で販売され、いたる所で急速に各地の陶磁器生産に強烈な影響を及ぼし、各地で競うようにその仿製が始まった。

ここ百年来、アジア、アフリカ、ヨーロッパ諸国の古城廢墟或いは沿岸地帯の遺跡の考古学調査で、次々と我が国の唐宋時期の陶磁器類が大量に発見された。その中には、少なからず黄冶窯の三彩と絞胎製品がある。殊に東アジアに於いては、我国と一衣帯水の関係にある日本が黄冶窯製品の出土が最も多く豊富である。黄冶窯跡出土の大量の実物資料と日本各地出土の黄冶窯産品とを対比する総合的研究の推進は、黄冶窯輸出品の生産情況、日本への輸入ルート、港湾(津)、品種、数量や日本の瓷器生産に及ぼした影響等、関連する諸問題の理解と研究に対して極めて有利な条件を提供する。

日本の輸入黄冶窯三彩製品には、俑は極めて少なく、ほとんどが器皿類であり、中晩唐期の産品が多い。この情況は、当時の歴史的背景や各時期の産品内容の变化情况と一致する。中唐以後、唐王朝貴族政権の崩壊によって、奢靡な生活と厚葬の風に従って興起した高大華麗な

俑類製品は、これによって市場から姿を消し急速に消失する。陶磁業生産を支えた主要な階層も代わり、中下層の地主や市民階層になった。別の方面では、商業ネットワークの絶え間ない拡大、特に対外貿易の拡大と広範な販路によって、新しい需要産品に適応した三彩器皿類の生産は、順調な上昇形勢を見せ、当時の中外各地で良く売れる人気商品となった。

2 黄冶窯唐三彩と奈良三彩との関係に関する問題

初唐時期に始まる黄冶窯の三彩製品と絞胎製品は、貴重な引き出物、珍奇な陶磁、貿易商品として、様々な方式で日本に輸入された後、貴族と富豪者を中心に各階層の人々に愛好され、急速に彼らの生活(宗教、冠婚葬祭、手工業、文化藝術等の各領域)に深く浸透していった。日本の学者矢部良明氏は、古代の文献を引き、中国商船が日本に到着時、日本人が争って唐物を購買する情景を詳しく叙述している。「延喜3年(903年)の太政官符によると、博多津の民間貿易の情況に関して、このように記載されている。『唐人商船到着の時、諸院、諸官、諸王各家は、官吏が到着前に使いを遣わし、争って唐物を購買する。郭内の富豪の輩、遠物を心から愛し、先を争って交易する』。この文書では、上層顯貴から富裕商人階層など広範な階層到るまで唐物を迎え、人々は大変苦勞

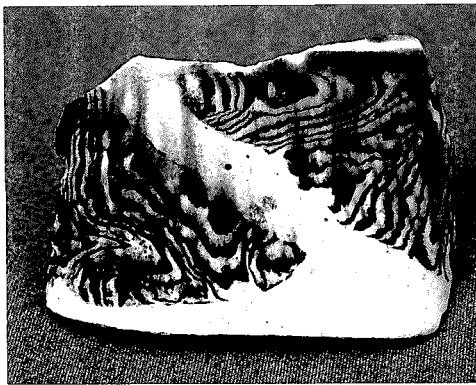


図50 鞏義黃冶窯出土黃釉紋胎陶枕片

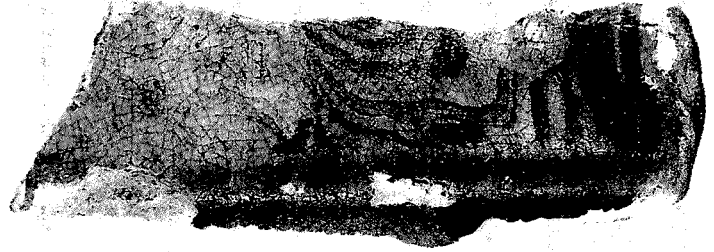


図51 太宰府市大宰府跡・市ノ上遺跡出土黃釉紋胎陶枕片

してこれらの品物を求めている。中国陶磁もその一つである。……中国に於いて唐三彩が盛んに流行するのは、700年初から、そして、20年余りの後には、その技法の伝播が始まる。これは盛唐長安の文化が、我が平城京に即座に伝播したと言う非常に良い例証になるばかりか、日本陶磁史の源流から見ると、我国最初で真性、独特な風格を持つ施釉陶器が生まれた画期的な事件である。

他のもう一人の日本の学者長谷部楽爾氏もまた、「衆人の注目を受けた最も古い中国陶磁こそ唐三彩……(中略)。唐三彩を模倣して作られた日本で最も古い施釉陶器である奈良三彩を見れば、唐三彩は、日本陶磁に直接的な影響を与えた最も古い中国陶磁の重要な品種と言うべきである。」

日本人学者の常識的な見方によると、朝鮮半島では5世紀に中国の影響を受け緑釉陶器の焼成を始める。7世紀後半葉には、日本でも朝鮮半島の影響を受け緑釉陶器の生産を開始し、8世紀に入って以後、また唐三彩の技法を導入し、三彩陶(奈良三彩)の製作を開始する。

3 奈良三彩の藝術風格

所謂、奈良三彩は、緑・黄・白の三種釉彩もの、緑・白或いは緑・黄の二彩釉のもの、緑、黄、白単彩釉の低火度焼成の鉛釉陶器を指す。器種には、罐、瓶、鉢、碗、大皿、皿、杯、盆、炉、甌、釜、硯、須弥山等がある。どの器種もまた多くの形式に分かれ、例えば、罐は短頸罐、唾罐、瓶は多口瓶、水瓶、浄瓶、広口瓶、長頸瓶、碗は圈足碗、平底碗、小碗等に細分される。

奈良三彩は遍く日本全国各地に分布し、中部と西部地区に比較的集中する。宮殿、官衙、寺院、祭祀遺跡から出土し、数量は祭祀遺跡から出土したものが最も多い。

外観から見ると奈良三彩の罐類は、造型が真ん丸く、荘重で安定し、一般には短頸で、肩が広く、圈足をもつ。

釉色は濃い、艶が無く、華麗さや艶やかさにおいては唐三彩に劣り、さらに唐三彩の器皿の肩腹部に施される各種貼花図案は見られない。総体的には奈良三彩の藝術的風格は、唐三彩の後裔—宋三彩—に近いといっても良からう。

日本民族は創造力に富み、学習能力に長じ外来文化を吸収し、それによって自己の民族文化藝術を創造、発展させる民族である。奈良三彩は製作工芸、器体造型、裝飾手法においては、中国唐三彩の伝統方式に少しも拘らず、工夫努力し、新たな創造を為し遂げる。それは、強烈な民族個性を備えるだけでなく、中国唐三彩の趣をも失っていない。奈良三彩の中期の製品は、技法の上では更に成熟度を加え、特有の新しい作風、民族風格が突出した日本の三彩と緑釉の姿がはっきりと現れている。奈良三彩は、中日両国陶磁藝術の完璧な融合といつてよからう。奈良三彩は日本社会各層の好み、貴族、富豪の趣味に更に適合したことは押して知るべしであるが、8世紀中頃以降、多彩釉陶は次第に減少し、二彩と緑釉に代わり、質も次第に粗悪になり、11世紀初には跡を絶つ。

(巽淳一郎)

- 1) 檜崎彰一「日本における施釉陶器の成立と展開」(愛知県陶磁資料館『天平に咲いた華—日本の三彩と緑釉』1998 8頁)
- 2) 矢部良明「日本出土の唐宋時代の陶磁」(中国古陶磁研究会・中国古貿易陶磁研究会『中国古貿易陶磁研究資料』第2輯 5頁)
- 3) 注2 6頁
長谷部楽爾「日本出土の中国古陶磁特別展覧(1975)」(中国古陶磁研究会・中国古貿易陶磁研究会『中国古貿易陶磁研究資料』第1輯)
- 4) 注1に同じ。他、1995年8月、檜崎先生が鞏義市文物保護管理所所長彦昭先生に宛てた書信の中で、奈良三彩の発生の源は鞏義唐三彩窯であるとはっきりと提言している。
- 5) 注2 8頁
- 6) 注3に同じ。